

令和5年度 金沢型学習スタイル実践推進事業 報告書

泉野小学校	重点課題推進校	教科一般・学習評価の充実
-------	---------	--------------

1 研究の重点と具体的な取組

(1) 重点1 見方・考え方を働かせることにつながる手立て

児童が単元や題材、一時間の中で見方・考え方を働かせるには、教科の特性を踏まえた手立てが必要である。それらの手立てを意図的・計画的に行うことで、児童はより一層見方・考え方を働かせることができ、学びを深めることができると考えた。児童に内在する見方・考え方を引き出し、児童の思考を活性化したり深めたりできるような手立てを日々の授業や研究授業を通して探った。

① 見方・考え方を引き出すための手立て

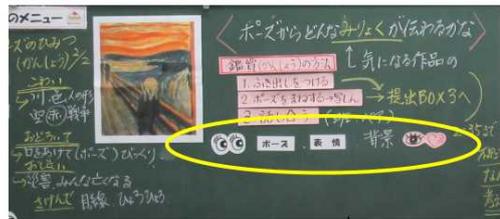
教師一人一人が年度初めに自分の研究教科を決め、その教科部会のメンバーを中心に授業をお互いに見合い、教材研究を深く行った。これまでに整理してきた目玉マーク（見方・考え方）の活用の仕方をもとに、キーワードが明確な構造的な板書をめざしてきた。また、見方・考え方を引き出すための効果的な手立て（板書写真下の☆印）やアイテムについて教科部会ごとに話し合った。

算数 ～わかりやすくせいりしよう～



★ 発問・問い返し
→整理できない理由を交流

図工 ～ポーズのひみつ～



★ 造形用語のカード

★ 見たと数が異なる図
→大きさ・配置に着目

★ ポーズ 表情 背景
見る 感じる

② 見方・考え方を汎用的スキルへと成長させるための手立て

昨年度までの実践を土台に、教科の見方・考え方を汎用的スキルへと成長させるために、教科部会ごとに考えた工夫を継続して取り組んだ。算数部会では、主に解決の見通しをもつ場面で見方・考え方を表出するためのアイテムを活用した。道徳部会では、「わかるな・すごいな・おしいな」のカードを使い、登場人物の立場になって考えることができるようにした。社会部会では、「空間・時間・関係」のカードを提示し、本時で大切にしたい見方・考え方について考えさせた。

★見方・考え方を表現するアイテム★

算数	考えるアイテム	図
絵 式 言葉表	～の何に分	テープ図
アレイ図 さくらんぼ	数直線	線分図
貯金の図 位のへや		数直線図
クリスマス		
○図		
社会		道徳
		わかるな
		すごいな
		おしいな
空間 どのおまわりについて いるのかな	時間 どのおまわりについて 暮らしているのかな	関係 どのおまわりについて 関係しているのかな

(2) 重点2 自己の学びを自覚化させるための手立て

一人一人に「自分の考えが深まったのか、学びの質が高まったのか」を振り返らせることでより深い理解と定着を図ることができると考えた。そのために、まとめや振り返りの時間を確保したり、書く観点を明確にしたりしてきた。また、書くことの他に教科の特性を生かし、1人1台端末の活用も学びの自覚化を促す振り返り

の手段として有効となると考えた。

国語 ～たずねびと～

単元を通して1枚のワークシートにまとめと振り返りを記入

自分の考えの変容や積み重ねが自覚できる成果物

体育 ～走り高跳び～

単元初め 今日のクラスの得点 **3245**

単元終わり 今日のクラスの得点 **3582**

名前	最初の記録	伸び	今日の記録
01	102	10	112
02	105	10	115
03	108	10	118
04	110	10	120
05	112	10	122
06	115	10	125
07	118	10	128
08	120	10	130
合計記録			656

クラス全員の合計記録を発表する
→記録の伸びを実感！
自己だけでなく、クラスでの学びも自覚化

中でも国語科では単元を通して1枚のワークシートにまとめと振り返りを記入したり、体育科では走り高跳びのクラス合計記録を単元初めと単元終わりで比較して学びの変容を自覚したりする等教科ごとにたくさんの工夫が見られた。

さらに、研究授業に臨む際には、指導案に「目指すゴールの姿」をB・A評価として明記した。単元を通して育てたい児童の具体的な姿や身に付けさせたい資質・能力を明確にすることで単元計画を進めるにあたり、児童の学習評価を適切に行えると考えた。加えて、ねらいに到達できない児童に対して的確な声かけや支援ができるように、主に課題をつかみ、自分の考えをもつ場面での教師の支援(C→B)を考え、明記した。

単元計画

① 日記を読んで、心に響いた言葉からその人物の「生き方」を考えられたよ。偉人の生き方からヒントをもらって、自分の生き方にどうつながるか考えることができた。

② 日記を読んで、心に響いた言葉やそれに関係する文章からその人物の「生き方」を考えられたよ。偉人の生き方からヒントをもらって、自分の生き方にどうつながるか具体的に考えることができたよ。学習が終わっても他の偉人の伝記も読んでみたいよ。

本時

めざす姿をB/A評価として記し、ゴールの姿を具現化

① グラフからわかったことを、なぜかな?と考えると、呼びかけたいことがはっきりしたよ(「時間」「場所」のどちらか)。

② ①のグラフからわかったことを、なぜかな?と考えると、呼びかけたいことがはっきりしたよ(「時間」「場所」を関連させよう)。

(3) 全体を通して つなぎ生かすための手立て

今年度は学校研究主題の「考えを深める子」に迫るために新たに「つなぎ生かす」というキーワードを学校研究の3つ目の柱として位置づけた。教師が一時間の中でつなぎ生かすものを明確にもち、効果的なタイミングで手立てを打った。系統的なつながりを意識して本時と既習をつないだり、子ども同士や子どもと生活場面を結びつけたりすることで自分だけでは曖昧な考えを確かなものにしたたり、考えを

重点1 見方・考え方を働かせる

重点2 学びを自覚化させる

見方・考え方 **つなぎ生かす**

既習と(系統的なつながり)

単元を貫いて大切にしたい見方・考え方

教材と子ども | 子どもと子ども | 生活と子ども

未習と(次時への見通し) など

理科 ～植物のからだのはたらき～

動物のからだの働き

血液と同じように身体全体に栄養を運んでいる

既習と

植物のからだの働き

根から水を吸収して植物のからだを全体に運ぶ

道徳 A-(5)希望と勇気、努力と強い意志

友達と

だれの意見が聞きたいかな?

主体的な学び
他者理解
多面的・多角的

深めたりすることができた。理科では、前単元の動物のからだの働きで学んだ「血管は栄養を体全体に運ぶこと」を本時の「根から吸収してからだ全体に運ぶこと」につなぎ生かす工夫を行った。道徳では、子ども同士をつなぐために登場人物の心情を顔の表情に描いて表し、オクリンクを使って交流した。

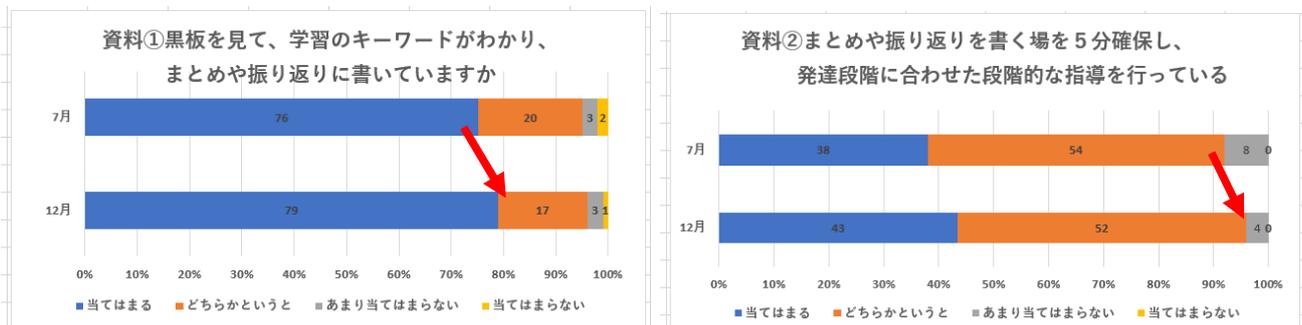
2 取組の検証

(1) 重点1 見方・考え方を働かせることにつながる手立て

研究授業による事後研究会での指導主事等による指導・助言及び授業者の考察等をもとに、教科部会としての学びを整理し、研究授業通信等を作成し、職員室や本校クラスルームに掲示する等全体で共有する場を設定した。教科ごとに見方・考え方を明確にした本質に迫る教材研究によって、見方・考え方を引き出すための手立てについて理解が深まった。

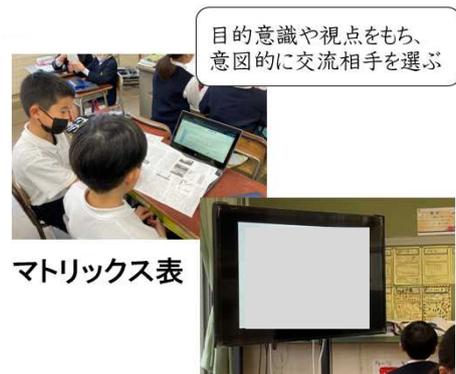
(2) 重点2 自己の学びを自覚化させるための手立て

児童アンケートの「学習のキーワードがわかり、まとめや振り返りを書いている」(資料①)の項目で12月は96%の児童が肯定的回答をしている。また、教師アンケートの「まとめや振り返りを書く場を5分確保し、発達段階に合わせた段階的な指導を行っている」(資料②)の項目では、肯定的に回答する教師は7月より4Pアップした。これらの結果から児童・教師共にまとめや振り返りを大切にする意識が高まっているが、クラスの実態に合わせた段階的な指導やねらいに到達できなかった子へのきめ細やかな指導を丁寧に行っていく必要がある。



(3) 全体を通して つなぎ生かすための手立て

教師が一時間の中でつなぎ生かすものを明確にもち、効果的なタイミングで手立てを打つために様々な工夫を行った。系統的な学びのつながりをより意識できるように教室内に学習履歴を掲示すると、子どもたちは導入場面の課題づくりだけでなく、展開・終末場面でも掲示物を見ながら既習とつなぎ生かそうとする姿が見られた。また、子ども同士を結びつけるために、ICTによる考えの共有や国語科でのマトリクス表の活用等は有効な手立てであり、子どもたちが「〇〇さんと交流したい！考えを聞きたい。」「〇〇さんと伝え合いたい！」と思い、主体的に学習に臨む態度を育むことができた。また、教師が意図的にペア・グループ活動を設定し、子ども全員が授業に参加する意識を高めることに加えて、考えをもてるようになり、最後まで集中して取り組む様子が見られた。



3 成果と課題

(1) 重点1 見方・考え方を働かせることにつながる手立て

教師全員が年2回の研究授業（校内研や公開研）に取り組み、授業力を向上しようとする意識が高いところが本校の強みである。学年会・教科部会で教材研究を深く行ってきたことで教科の見方・考え方を捉えることができてきた。その見方・考え方を黒板に目玉マークとして位置づけたことで授業の終末だけでなく必要な時に振り返ることができた。それが児童にとって思考の拠り所になり、課題解決に向けて主体的に学習に取り組む態度を育ませることができた。また、意図的なペア・グループ活動を設定することで関わった友達の考えから自分の見方・考え方に変容や広がりが見られた。

(2) 重点2 自己の学びを自覚化させるための手立て

教師は日々の授業の板書を写真に撮り、板BANファイルに保管して見合うことで経験年数に関係なく、クラス間の指導内容が揃う点良かった。研究授業を行う際に、指導案に「目指すゴールの姿」（評価規準の具体の姿）や自分の考えをもつ場面での教師の支援（C→B）を明記することを通して、本時のねらいや児童の予想される姿（つまずきやすい場面や支援が必要な場面）を前もって考える大切さに改めて気付くことができた。課題としては、導入や展開場面を丁寧に進むあまり、終末場面にまとめや振り返りの時間を確保できないことがあった。毎週授業振り返りシートを週案に挟み、週2コマ終末場面を意識した授業を行うことで終末場面への意識を高めることはできたが、今後も取組を継続していきたい。また、黒板（アナログ）に一時間の学びの足跡を残してきたことは努力の成果である。しかし、1人1台端末（デジタル）を使い、主体的に取り組み、全員が参加する授業を目指すため、アナログとデジタルをバランスよく組み合わせる授業を考えていく必要がある。

(3) 全体を通して つなぎ生かすための手立て

今年度学校研究の新しい柱として「つなぎ生かす」ための効果的な手立てを探ってきた。本時のねらいを達成し、考えを深めるために何と何をつなぎ生かすべきか、各教科で授業実践を行ってきた。研究授業を参観する際には指導案上に明記したつなぎ生かす手立てが効果的であったかを授業整理会で話し合ってきた結果、年度初めよりも効果的な場面で手立てを打てるようになってきたが、まだ実践が少ないといえる。

手立てとして本時の学習内容と既習をつなぐことが多かったが、生活場面や子ども同士をつなぐことも重要であると感じた。効果的な手立てを打つためには、教師が各教科の指導内容や系統性を理解し、効果的なタイミングを見極めていく必要がある。